

W1章 構造形成に働く5つの力

この章では、構造形成と、構造伝達と、構造理解に5種類の力が働いていることを述べます。

W1.1 $E=mc^2$ (2)

エネルギーから物質が生じるように、表現意欲から言語が生じます。

W1.2 構造形成に働く5つの力 (3)

物質形成に大きな力が働くように、構造形成にも大きな力が働きます。

W1.3 5つの力はまだ数値化できない (6)

5種類の力は、まだ数値で表されていません。

無から有を生じる？

素朴な疑問があります。言語はどのようにして生まれるのか、という疑問です。ホモ・サピエンスは言語能力を持って発生しました。「能力」そのものは、見えませんから、「無」のように感じられます。一方、その能力によって生みだされる言語は、音声で表現され、聞こえますから、「有」として認識されます。

人間は、「無」から「有」を創りだしてきたのでしょうか。

E=mc²

物理学では、「宇宙は、無から有が生じたものか」という疑問に、この方程式で答えました。「質量とエネルギーの等価性」を表すものです。

$$E = m c^2$$

この方程式は次のことを表しています。

$$\text{エネルギー} = \text{質量} \times \text{光速の2乗}$$

この方程式によれば、「無」のように見えるエネルギーが、「有」として認識できる形をとったものが物質であり、形をとるためにとつともないエネルギーが働いている、ということです。

(もし、「エネルギー」を「有」とみれば、宇宙は「無」から生じたものではないということになり、「有であるエネルギー」はどうして生じたのか、が疑問となります。)

さて、この方程式の = を \rightarrow 、 \leftarrow に変えればこういうことになるのでしょうか。

$$E \rightarrow m c^2 \quad \text{エネルギーを物質に変換する}$$

$$E \leftarrow m c^2 \quad \text{物質からエネルギーを取り戻す (原子力)}$$

言語について考える私たちにとって、この方程式は示唆的です。もちろん、比喩的にはありますが、この方程式にならえば、こういうことになるでしょう。ただし、「言語」は脳の中で発生します。また、「言語」を、その第1段階である「構造」として表現します。「構造」は、すでにモデルにより可視化されていますので、「有」として認識されるものとします。

$$\text{表現意欲} = \text{構造}[\text{この中に強い力が働いている}]$$

これは、「無」のように見える「表現意欲」が「有」として認識できる「構造(言語)」の形をとり、構造の中にとつともない力が働いていることを表します。

ここでも、= を \rightarrow 、 \leftarrow に変えてみますが、 \leftarrow は、 $E=mc^2$ と異なり、そのままでは成立しないと考えられます。このため、取り消し線を施しました。

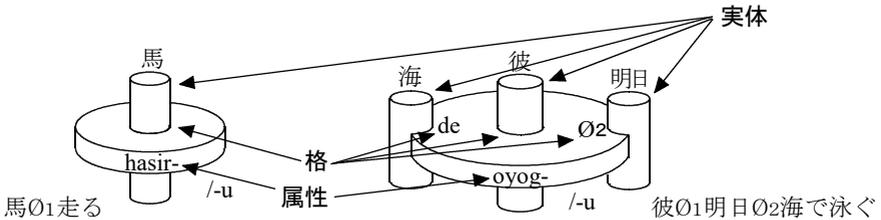
$$\text{表現意欲} \rightarrow \text{構造}[\text{中の強い力}] \quad \text{表現意欲を構造に変換する}$$

~~$$\text{表現意欲} \leftarrow \text{構造}[\text{中の強い力}] \quad \text{構造から表現意欲を取り戻す}$$~~

構造を作るために働く大きな力

$E=mc^2$ という方程式が示すことは、物質が形をなすために、とてつもない力が働いている、ということです。言語を研究する私たちが、この方程式から示唆を受けることは、「構造」を形成するときにとてつもない力が働くのではないかと、ということです。そこで、「構造」の中を改めて検討してみたいと思います。

「①実体」と「②属性」と「③格」、この3者それぞれとその作り出す「④構造」、それに「⑤個人百科事典に働く力」を検討すればよいことになります。

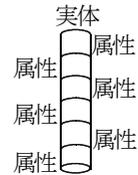


図W1-1 構造を構成する「実体」「格」「属性」

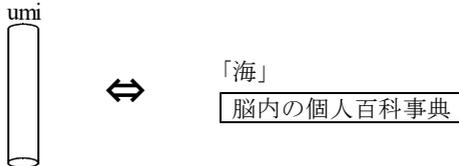
① 実体に働く力

上の図で「実体」に当たるのは、「馬・海・彼・明日」です。「実体」は属性が縦に集合したもので、棒の形をしています。(S1.3参照 Sコラム3参照)

「海 umi」と「馬 uma」は1音ちがうだけですが、意味はまったく異なります。「um」では意味は分かりませんが、「umi」と言った瞬間に意味が分かります。このとき、「umi」という実体は脳内にある個人百科事典の「海」と結びつくものと考えられます。(この結びつきは、当然のことと考えますので、構造モデルには表示しません。)



図W1-2 実体

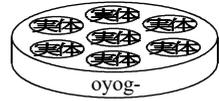


図W1-3 「umi」が「海」と解釈される

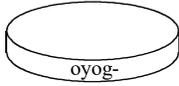
つまり、「実体に働く力」には、2とおりのものが考えられます。「属性」を縦に集める力と、実体を個人百科事典で解釈する力です。(「個人百科事典」は個人の経験とともに増大します。忘れられる内容もあります。市販の事典とは異なります。)

② 属性に働く力

図W1-1で「属性」に当たるのは、「hasir-」「oyog-」です。「属性」は実体が横に集合したもので、円板の形で表現します。(S1.3参照 Sコラム3参照)



図W1-4 属性



「泳ぐ」

脳内の個人百科事典

図W1-5 「oyog-」が「泳ぐ」と解釈される

「属性に働く力」の場合も、働く力は2とおりにあるものと考えられます。「実体」を横に集める力と、脳内の個人百科事典で解釈する力です。

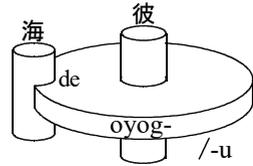
③ 格に働く力

「格」は「が,を,に,で」等の「格詞」で表現され、実体と属性の論理関係(意味関係)を示します。構造図では円板上の位置で示されます。

たとえば、実体「海」と属性「泳ぐ」は、「で格」や「を格」などの論理関係を持っています。

海で泳ぐ

海を泳ぐ



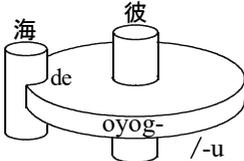
図W1-6 「で格」で結びつく

その「格」が結びつけることのできる実体と属性がどのようなものであり、結びつけたときにどのような意味が生じるかは、「個人百科事典」が教えてくれます。「海で泳ぐ」の「で格」なら、結びつける実体と属性は、実体が行為の行われる場所(海)であり、属性が行為(泳ぐ)である、という関係にあります。

行為の行われる場所を表す | 実体 ⇔ で格 ⇔ 行為を表す | 属性

図W1-7 格は意味で実体と属性を結ぶ

この「で格」の「意味」は、「実体の示すものが行為の行われる場所である」です。



「で格」

脳内の個人百科事典

図W1-8 「de」が「で格」と解釈される

「格に働く力」の場合も、2とおりにあります。「実体」と「属性」を論理関係で結びつける力と、「格」「格詞」を脳内の個人百科事典で解釈する力です。

W1.3 5つの力はまだ数値化できない

力の数値化は可能？

$E=mc^2$ という式を参考に、「構造」を形成するときにとてつもない力が働くと考えます(W1.1)。これは、確かにそのとおりだと考えられますが、脳内に働くこの力は、今のところ、数値で表せません。

脳内で、たぶん電氣的信号の動きによって、構造に相当するものが構成されるのですが、私たちはそのための電氣的信号の動きを知りません。それを表す単位も知りません。つまり、「構造」が形成されるために働く力はまだ数値化できないのが現状です。

ここに脳内に働いているであろう力の種類を一覧表の形でまとめておきます。(音声を発するために働く力は、ここには含めません。)

表W1-1 構造形成のために脳内に想定される5つの力

働く対象		力の内容
①	実体	属性を縦に集める力 実体を個人百科事典で解釈する力
②	属性	実体を横に集める力 属性を個人百科事典で解釈する力
③	格	実体と属性を論理関係で結ぶ力 格詞を個人事典で解釈する力
④	構造	構造の正確な理解のために個人事典にある情報を適用する力
⑤	個人事典	情報記載の力、個人事典を維持する力、個人事典を活用する力

日本語文法研究が普遍性につながる

私たちは日本語のしくみを解明するつもりで研究しています。しかし、研究が進んでくると、日本語のしくみには、日本語に限定されない要素も数多くあるのではないかと考えられてきます。

たとえば、本章で触れている、構造に働く5つの力は、あらゆる言語に共通した要素ではないのかと思われます。……ほかに、時相についてのモデルなども普遍性がありそうです。

私たちは、日本語の研究を通して、実は、人間の言語のしくみそのものを明らかにしようとしているのかもしれない。

問W1-1 聞き手に構造を再現してもらえれば、伝達は完了したといえますか。

問W1-2 市販の百科事典と個人百科事典の大きな違いは何ですか。

問W1-3 「頭がいい」という表現が、褒め言葉にも皮肉にもなるのはなぜですか。